
 卷 頭 言

もう一段の飛躍を

大 坪 孝 至



日本表面科学会は、本年9月で創立10周年を迎えた。初代会長上田隆三先生の先駆的・精力的な御努力で創立されたものの、最初の数年間は運営的にも財政的にも非常に困難な危機的状態が続いた中で、当時の常務理事の方々の私財まで投入しての献身的御努力とチームワークのおかげでどうにか解散の事態は回避し、その後の歴代会長をはじめとする常務理事諸氏の継続的な御努力により、ここ数年は完全に民主的な運営と健全な財政状態が確立されている。当学会の会誌も当初の年2回発行から年6冊をへて年9冊まで増加し、来年には月刊化が予定されており、内容的にも着実に充実してきている。講演大会も年々盛会となり、昨今では2会場、2日間では収容しきれないほど講演申し込みが増加し、会場探しで担当理事が頭を痛めるほどである。基礎講座、セミナーもそれぞれ表面分析法入門と表面科学の最新のトピックスをテーマにして5月と6月に定例的に開催されるようになり、毎年多数の参加を得て大好評を博している。今年は外国の著名な研究者を招いて、10周年記念の国際シンポジウムを開催する事も計画されている。さらに、出版面でも既刊の表面分析辞典、表面・薄膜分子設計シリーズに続いて、“表面科学の基礎と応用”の出版準備が進行中である。誠に喜ばしい限りである。

しかし、表面科学会が学会として本当の意味で存在価値を持ちうるためには、さらにもう一段の努力による飛躍が必要に思えてならない。何故ならば、現在の表面科学会は多くの専門分野で大きな意義を持ち始めた“表面”を共通のテーマとして学際的に研究知見を交換するユニークな学会と位置づけられているが、会員の大多数の人々にとっては、研究成果をまず最初に発表したり、専門分野の競争相手の論文が発表される一次学会ではなく、それぞれの専門分野を表面という共通の横糸でくっつけた二次学会の役割を果たしているのが実情であろう。電子デバイスやセンサーで代表されるように、“表面”が大きな役割を果たす素子が世の中で広く用いられるようになってからの歴史がまだ浅いため、既存の他学会が一次学会の役を果たすのはやむを得ない面もあろう。しかし、先端技術と云われているものの殆どが、“表面”、“薄膜”、あるいは“バイオテクノロジー”に基盤を持つとされている現在、表面科学会を今のあり方で安定的に定着させる安易な道を選ぶのではなく、“表面”、“薄膜”に関する一次学会の位置を当学会が確保することを目指して、講演大会、シンポジウム、研究会、会誌、出版など全ての学会活動を質的・量的にもう一段さらに向上・拡充する新たな努力を開始すべきであると思う。既存の学会にとらわれない若い血を思いきって導入し、創成期に匹敵するほどの若々しい献身的努力を要請できるような場を作り上げることが先決であろう。10周年が新たな飛躍の出発時点となることを切に希望する次第である。

(新日本製鉄(株)第一技術研究所)